

高校・大学を接続するルーブリックの実践と評価

岩崎 公弥子 時岡 新 内山 潤
Kumiko IWAZAKI Arata TOKIOKA Jun UCHIYAMA

Practice and evaluation of rubric connecting high school and university

1. はじめに

近年、幼稚園から大学院に至るまで学びの場では、主体的・対話的で深い学びを促すアクティブラーニングの導入が急速に進められている。「アクティブラーニング」という言葉が注目されるようになったのは、2014年11月の中央教育審議会の諮問以降であるが、これは、昨今のグローバル化の進展、AIを含むICTの技術革新、生産年齢人口の減少などが背景にある。

急速な社会構造や雇用環境の変化にともない、子どもたちが身につけるべき力は知識・技能だけではなく、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力・人間性など多様性を増している。しかし、これらの育成には、受動的な知識習得型では十分に得ることができず、活用型、探究型といった能動的な学びが必要となる。すでに、中学や高等学校では、「総合的な学習の時間」（総合的な探究の時間）を中心に、大学では少人数の演習やプロジェクト型の授業を中心にアクティブラーニングの手法が導入されるようになってきた。

今や多くの学びの場でアクティブラーニング型の授業が実施され、所謂、21世紀型の力の育成が行われてきている。しかし、これらの力がどのように段階的に身につけてきているのか、その評価手法ははまだ試行錯誤の段階にある。

そこで、本研究では、能動的な学びにおいて、どのような評価が妥当であるか新たな評価ツールである「ルーブリック」を導入しながら考えていきたい。加え、本研究では、新しい学びの指標が校種ごとに分断されている現状を踏まえ、大学独自のルーブリックを作成するだけでなく、高等学校と大学を接続する部分についても着目していく。

2. ルーブリック

2-1. ルーブリックとは

ルーブリックとは学習者の学習到達度を評価する指標である。一般的には、左側に評価観点を置き、右軸に評価尺度（レベル）を配置したマトリックス形式で示される。例として、筆者らが作成した「アカデミック・ライティング」のルーブリックの一部を表1に示す。

表1：「アカデミック・ライティング」ルーブリック（抜粋）¹

	6	5	4	3	2	1
リサーチ クエスション	リサーチ クエスション が独創的で、 かつ、実現 可能なテーマ で設定されて いる。また、 その分野にお いて、研究と して十分な価 値あるもの になる可能 性がある。	リサーチ クエスション が独創的で、 かつ、実現 可能なテーマ で設定されて いる。	決められた 研究条件や 期限の中で、 十分に結論 まで展開す るには難し い可能性が あるものの、 リサーチク エスション が独創的で、 具体的に設 定されてい る。	結論が容易 に想像つく ものであっ たり、主観 的な結論に とどまる可 能性がある ものの、リ サーチクエ スションが 具体的に設 定されてい る。	漠然として いたり、調 べればすぐ に分かるも の、リサー クエスチ オンが設 定されてい る。	リサーチ クエスチ オンが設 定されて いない。

このようなルーブリックを用いた研究や実践は様々なところで行われており、多くの利点が報告されている。例えば、評価基準が明確になり一貫性と公平性が保たれる、教員間の情報共有が効果的に行われる、到達目標に向けた学習活動に取り組める、自らの学習活動を振り返ることができるなどである。今まで「あいまいに」「主観的に」「暗黙のうちに」評価されていた観点が明らかになることで、学習目標に向かう過程を「的確に」「客観的に」示すことができるのである。これらについては、すでに筆者らの研究（岩崎他（2019））でまとめているので参照いただきたい。

2-2. DP対応ルーブリックの開発

筆者らが所属する金城学院大学では2019年度からディプロマ・ポリシー（以下、DP

¹ 岩崎他（2019）を参照。多くのルーブリックは4段階のものが多く、「アカデミック・ライティング」のルーブリックは、中学から大学まで10年間活用するため、6段階となっている。

と略す)に基づくルーブリックの活用を行なっている²。「学生自己評価 DP対応ルーブリック」(以下、DP対応ルーブリックと略す)と名付けられた本ルーブリックは、以下に示すA～Lまでの12の観点からなる。

知識・理解

- (1) A.知識、B.理解

汎用的技能

- (2) C.情報の収集と分析、D.論理的思考、E.問題の発見と解決
 (3) F.言語表現(外国語)、G.言語表現(日本語)、H.コミュニケーション

態度・志向性

- (4) I.自律、J.チームワーク
 (5) K.隣人愛

統合的な学修経験と創造的思考力

- (6) L.創造的思考

また、レベルは4段階に設定しており、レベル1が本学の大学共通アドミッション・ポリシー、すなわち、高等学校卒業時(大学入学直後)のレベルを基準にしている。また、レベル4が大学卒業時までの学修の成果として身につけてほしい内容となっている。例として「論理的思考」を表2に示す。

表2：金城学院大学「DP対応ルーブリック」の「論理的思考」

4	3	2	1
複数の客観的な根拠やデータを適切に検証、選択することができる。そこから説得力のある論理展開により自分の意見を組み立て、主張することができる。	信頼できる情報源から得た複数の客観的な根拠やデータを選択し、それらを用いて矛盾なく自分の意見を主張することができる。	自分以外の信頼できる情報源から得た一つ以上の客観的な根拠やデータにもとづきながら、自分の意見を主張できる。	自分が適切と思う理由や根拠を示しながら、自分の意見を主張できる。

本ルーブリックを用いた評価を入学生対象に2019年4月に実施した。実施方法は、本学のポータルサイトであるK-PORTのアンケート機能を用いて回答させた。新入生オリ

² 渡辺他(2019)

エンターションの一環として取り組んだため、入学生1,188名のうち、有効回答数は1,135名と高い回答率となった（回答率：95.5%）。

ループリックの意図としては、各項目において7割以上の入学生が「レベル1」を回答するよう設計した。しかし、分析を行うと「コミュニケーション」「自律」「チームワーク」の各項目において7割を下回る結果になった。これらの項目は、部活動やアルバイトなど学習以外の経験が大きく影響する項目であると考えられた。そこで、この3項目の妥当性を検討するため、4年生へのインタビュー調査を試みた。

3. 「DP対応ループリック」の課題

3-1. 4年生への「DP対応ループリック」の調査

本調査では、2020年1月に人間科学部多元心理学科、国際情報学部国際情報学科、文学部日本語日本文化学科の4年生、3名に「DP対応ループリック」を用いた評価を行ってもらい、そのうえでなぜそのレベルを選択したのか、また、評価をする際に判断に迷った点があったかなどを尋ねた。なお、「DP対応ループリック」の導入は2019年度入学生からであり、4年生にとっては初めての経験となる。調査時間は、ループリック評価とインタビューを含め約1時間である。

本調査では、ループリック全体に対して聞き取りを行ったが、本論文では、前章で課題となった「コミュニケーション」、「チームワーク」、そして、「言語表現（外国語）」について報告する。

なお、本論文では、多元心理学科の学生を「多元Aさん」、国際情報学科の学生を「国情Bさん」、日本語日本文化学科の学生を「日文Cさん」と記す。

3-2. 「言語表現（外国語）」

3-2-1. 「言語表現（外国語）」の調査

「言語表現（外国語）」のループリックは表3のとおりである。

表3：「DP対応ルーブリック」の「言語表現（外国語）」

4	3	2	1
読解および作文の基本である語彙・構文を理解しており、ほぼ正確に読み、書くことができる。また、日常の場面で使用されている自然な外国語表現について、ほぼ正確に聞き取り、話すことができる。さらに、簡単な内容であれば外国語によるプレゼンテーションもできる。	読解および作文においていくつかの間違いはあるが、基本的な語彙・構文を一定程度理解している。日常の場面で使用されている自然な外国語表現をある程度理解し、話すことができる。	いくつかの文法的な間違いや語彙の間違いはあるが、簡単な実践的な外国語での会話と、初歩的な読解および作文の技術を習得している。	日常のことがらについての外国語の文章やよく使用される外国語の表現が理解できる。

3名のインタビューを表4にまとめる。

表4：「言語表現（外国語）」の調査まとめ

	回答レベル	気づいた点、感想
多元Aさん	レベル1	<ul style="list-style-type: none"> ● 共通教育「英語コミュニケーション」の授業しか履修していないので、2年生までしか英語を学ぶ機会がなかった。 ● 3.4年生で英語を学んでいないので英語力は下がったかもしれない。 ● 中高時代はほぼ毎日英語の授業があり毎日勉強していたが、大学に入学してからはそのようなことはなくなった。
国情Bさん	レベル3	<ul style="list-style-type: none"> ● 英語で卒業論文を書いた。また、他学部英語関連の授業を積極的に履修したため、大学に入学してから英語をたくさん学んだ。 ● 大学に入学し、積極的に英語を学び、英語の力が飛躍的に伸びたという自覚がある。 ● レベル2～4で迷った。なぜなら、リスニングとリーディングはできるが、スピーキングとライティングに自信がないからである。
日文Cさん	レベル2	<ul style="list-style-type: none"> ● アルバイトで外国のお客さんが来ても全く対応ができない。 ● 大学で英語に触れる機会が少ないので、高校の時よりもレベルが下がった可能性がある。

3-2-2. インタビューの詳細

<多元Aさん>

Aさんは「レベル1」と回答し、その理由を「中学1年生のときから英語で転けてい

るので」と説明した。質問者が「レベル1は高校卒業程度の能力を想定している」と説明すると、Aさんはさらに自己評価を下げて「だったら（現時点での自分の英語力は）もっと下かもしれないです、本当に英語がとっても苦手で」と答えた。また大学の英語科目の成績評価も芳しくなく、2年生の文法科目では単位を落としているという。ところが、広い意味での「英語力」について聞くと、大学以外での経験をふまえて「海外旅行が好きなので、単語をつなげて外国の方としゃべる機会（があり、そこでの英語力は）すごく付いたと思う」とのことであった。

Aさんはインタビューの別の箇所でも、中学時代の英語学習について「(当時の) 英語の先生とは仲が良くて、すごく助けていただいて。補習にもよく参加していたんですが、少しでも点数を上げて赤点を回避しようと、友だちともやっていたので、授業は楽しくやっていたんです（けれども成績評価は伸びなかった）」とふり返ったり、「外国に行くと、笑顔とか身振り手振りを使ってみたり、コミュニケーションをとって（その国の）文化に触れたりする。その場の雰囲気自分なりの表現をしたり、知っている単語をしばり出すのは、すごく得意なので」とも話している。

<国情Bさん>

Bさんはループリックの全体で自己評価に「迷った」と言い、「言語表現（外国語）」については次の点で判断が難しいと話した。「レベル3の『日常の場面で使用されている自然な外国語表現』というのが、人によって英語に触れる機会は多かったり少なかったりすると思うんですけど、それがどの程度なのか分かりにくかったのと、英語にはいろいろな技能（Speaking、Writing、Listening、Reading）があるうちのどれについて考えればいいのか、簡単な内容であれば英語でプレゼンもできますが、文法が正しいかと言われると微妙なので、選びにくかったです」。技能による自己評価の違いとはどういうことか。「4つの技能によって（自分の能力、自己評価に）偏りがあるんですね。ListeningとReadingであれば、WritingやSpeakingよりも簡単だと思うんですけど、そちらの方が若干、他の技能よりは（自己評価が）高くて。日常の場面と言われると、具体的にどういった場面を想定すればいいのか、と迷います。例えば駅で困っている人に声をかけて、答えられる程度なのか、とかですね」。ループリックに書かれた「日常」について、具体的にどのような場面を想定すればよいか判然としなかったようである。

<日文Cさん>

先にBさんも指摘したとおり、「日常」のどのような場面において、どのような目的で外国語（英語）を使うのか、その必要性によって自己評価に迷いが生じる。Cさんは「個

人的な話なんですけれど、アルバイトで外国の方が来店されることが多くて、そういう時に実践的に英語を使えるか、と言われると全然使えなくて。実際、外国の方に英語で注文をされても全然分からないことが多くて。仕方なくGoogleの翻訳アプリを使っていることもあるので、そう考えたら、文章もその場で英語で伝えることはできないし、聞き取ることも難しいので（自己評価を）2としました」と答えた。

3-2-3. 考察

Aさんの場合、ルーブリックが想定した基準のあらし、彼女自身が想起する大学の授業・成績、日常生活での実際の英語運用の状況に様々な不一致があった。質問者が大学以外での経験に注目して「自覚としては相当に頑張っているのだから、レベル2や3でもいいのでは?」と聞くと、彼女は「本当にそうなんです」と返答した。これらのコメントには、少なくとも(1)自己評価といえども何らかの客観的指標との照合を要するというルーブリックの基本的性格からくる問題、(2)ルーブリックが捉えようとしている各種能力の内実と学修者当人の実感との乖離という問題、が含まれている。この(2)に関連して、Aさんの中学時代の回想に注目したい。補習を通じた英語との接触は、担当教員や友人たちとの交流とともに、学修者自身の積極的なコミュニケーション行動を誘発した。そこには新・学習指導要領が示す「主体的な学び」の萌芽を見いだすこともできる。今後はそれらをも、ルーブリックによって捕捉できるようにすべきである。

ところで、Aさんは自己評価が低かったが、Bさん、Cさんもそれぞれレベル3、レベル2であり、卒業年次の4年生であっても自己評価は最高レベルの基準4には到達しにくい。次にそれについて考えたい。比較対照のために「言語表現(日本語)」を用いよう。日本語に対する自己評価はBさん、Cさんともに最高レベルの基準4であった。Bさん「自分が今までに書いてきた(日本語の)レポートとかを思い出して決めたんですけど。そこまで変な語彙や表現などを使っていないと思いますし、一応、読んで筋が通っているものを出しているつもりなので」。Cさん「自分の日本語能力は低くはないという自信があるので。卒論も、勢いで書いたりはしたんですけど、いい日本語を使ったのではないかと自分なりに思っていて。他のゼミ生とのあいだで卒論のレジュメを作って読み合ったりしたんですけど、その人たちの文章力が低いと思ったりはしなかったんですけど、でも読んでいるときに、文と文のつながりは自分の方が上だなと思ったことはありました。人と比べて、という意味も込めて(自己評価を)4にしました」。Bさん、Cさんともにレポートや卒業論文という、すでに客観的な評価を得ている事例があるために自己評価の見極めが容易であった。これらに対して「言語表現(外国語)」

が想定する「日常の場面で使用されている自然な外国語表現」には回答者がすぐに想起できる具体的な指標が乏しく、結果として自己評価の迷いにつながっている。

比較対照とした「言語表現（日本語）」だが、Aさん、Bさん、Cさんともにさらに詳細を語ってくれた。それらを参考までに示しておく。

Aさんは「日本語」の自己評価はレベル2である。これに対して質問者が「レベル1」は高校卒業レベルですが、それはクリアしていると判断していますか？」と問うと、「(自分の) 大学入試はAO入試で論文を書いたのですが、それに関して、高3の時にすごく文章力が上がったというか、自分の中ではそこで(入試の準備を通して) 高校卒業レベルに追いついた(達成した) という印象があるので、(自己評価は) 1ではない(それ以上) と判断しました」と答えた。続けて質問者が3に到達しなかった理由を聞くと「うーん、(レポートなどで与えられた/自分で決めた) タイトルに対して、内容が最後の方でズレてきてしまったりするのが引かかる。文章をたくさん書いても、最初と最後がズレてしまうので、3という評価はどうか、と思って」とのことであった。ここまでの回答はAさんの自覚にもとづくが、自分の能力を相対的に見る機会はあるのだろうか。その点について、日本語のWritingを人と自分とを比べてみたことはあるかと聞くと、「ありました。すごくまとまってきれいな文章を書く人(同級生など)もいるので。そういうときに、私は、すごいと言うだけ以上に、個々はまねできるなとか、次はこう書いてみようといってプラスに考えて、よいところを盗もうっていうタイプです」と積極的な姿勢を見せた。同じ「言語表現」といっても、先に聞いた英語(外国語)と日本語とではだいぶ違う積極性を示している。

他方、Bさん、Cさんの二人には、大学入学以前から、金城学院高等学校での読書感想文や卒業論文の経験もあった。Cさん「小学校の時は文章を書くのが苦手で、ぜんぜん書けてなくて。中学では強制的に、とにかく書かなくちゃいけなくて(読書ノート、読書感想文など)、それでやっと自分の考えを書けるようになってきているので。無理矢理、読書感想文を書かせられたのはいい練習になったと今では思います」。また大学入学時点での自分の力をふり返って、「高校のうちに卒業論文に向けた授業があるじゃないですか。あれで一通りの文章の構成なんかを学べるんで、大学に入ってからレポートも書きやすくて。あれだけ(の長い論文を) 書いたことで自信がついて。(大学に入学してすぐの頃も) 基本が分かっているんで、他の人たちよりもスタートがスムーズでした」という認識を持っていた。筆者らが構想している中高大10年一貫ルーブリックの可能性と必要性を示唆する回答である。

3-3. 「チームワーク」

3-3-1. 「チームワーク」の調査

「チームワーク」のルーブリックは表5のとおりである。

表5：「DP対応ルーブリック」の「チームワーク」

4	3	2	1
チームで作業を行う際に、自分も含めた構成メンバーの能力や適性に応じた役割を考慮した上で、他者と協働して目標の実現のために共に行動できる。	チームで作業を行う際に、自分の役割は適切に果たしつつ、他のメンバーが果たす役割についても理解し、必要に応じて自分の意見を述べるができる。	チームで作業を行う際に、与えられた役割を他のメンバーと協調しつつ責任をもって成し遂げることができる。	チームで作業を行う際に、自分も他のメンバーと同等の役割や責任があることを理解している。

3名のインタビューを表6にまとめる。

表6：「チームワーク」の調査まとめ

	回答レベル	気づいた点、感想
多元Aさん	レベル4	<ul style="list-style-type: none">● 3・4年のゼミでは、同じ目標をもった人たちがいたため、課題に向けて頑張ることができた。● ゼミだけではなく、アルバイトやサークルを通じて培ったものも大きい。
国情Bさん	レベル3	<ul style="list-style-type: none">● クラスの仲間など知っているメンバーのチームであればレベル4だと思うが、知らないメンバーでのチームワークであればレベル3だと思った。● 大学に入学してから、グループワークが多くなり、苦手意識がなくなった。
日文Cさん	レベル2	<ul style="list-style-type: none">● 大学でチームワークを学んだ実感はない。● 部活動やサークルに入っていなかったため、アルバイトで培った経験が大きい。

3-3-2. インタビューの詳細

<多元Aさん>

この項目の自己評価のために想起した実例として、Aさんは第一に「ゼミ」を挙げた。彼女は自己評価が「レベル4」である理由として「ゼミのメンバーはすごく仲が良く、それ以前はぜんぜん知り合いではなく、しゃべったこともない人たちだったけれど、同じ目標を持っていて、その中でいろいろな患者さんについて考えを出し合って作業できた、(良い) チームワークだったと思います」と答えた。Aさんは精神保健福祉士の

資格取得を目指してゼミを選んでおり、他のメンバーも同じ目標を持っていた。他のゼミでは“友だち同士で同じゼミに入る”傾向も無いとはいえなかったが、Aさんの場合にはそれがなく、ゼミ・メンバーは「知らない人ばかりでした」。その中でチームワークの自己評価を「4」にまで高めたのである。もし大学入学当時に自己評価していたら「1か、1より下（だったと思います）」。ゼミの他にはどのような要因があると思いますか、との質問には「学外でのアルバイトやサークルも少なからずあると思います。3年生（のとき）がいちばん成長したな、と思います」と答えた。

質問者が、チームワークが得意だなと意識しだしたのはいつ頃ですかと再度問うと、次のように答えた。「やっぱりゼミ内ですかね。意見をすごく言うし、聞くし。（自分の長所は？ と聞いた）発言する力かな、と思います。でも自分の意見だけにとらわれずに、相手の意見を聞き入れる力はあると自分でも思います。そこは柔軟に（聞くことができる）。（それを自覚し始めたのが）3年生のゼミです。3年生の実習に向けての討論会、話し合いで、私はいっぱい発言するけど、黙っている人もいないじゃないですか。だけどそういう人に「どう思う？」と話を振ると、話してくれることもある。良い意見を持っているのにしゃべらない人もいるから、そういう人に先に話を振った方がいいなと思うこともあるので、そういうことをしっかり見るようにしていました」。

<国情Bさん>

Bさんの自己評価は、こちらの想定よりも多層的だった。「チームワークの自己評価は、3にするか4にするかで迷いました。（想起する）構成メンバーの能力をお互いに知っている間柄で、誰がどういう分野が得意か知っている場合なら（そこで活動した経験に基づけば、自己評価は）4だったと思うんですけど。（それに比べて）まったく初めましてのメンバーだと（そのような場面に身を置いたとすれば、自己評価は）3に寄るかなと思いました。ただ、チームワークの必要な授業は国情では多かったので、苦手意識は無くなりました。岩崎先生にもお世話になっているGenius Supporters³に入っているんですけど、そのグループの中ではお互いの得意・不得意が分かっているので、それによって仕事を振り分けて取り組んできたので、そういう経験については（自己評価は）4かなって思います」。

³ Genius Supportersとは、金城学院大学国際情報学部の学生が組織する学生のパソコン利用をサポートするグループである。

<日文Cさん>

Cさんの回答には、所属する学科での学びが強く影響している。「チームワークというのは得意ではありません。学科では個々での授業が多かったのです。グループといっても2人で、仲の良い人とやってしまうことが多かった。チームワークが育てられた授業は、大学では無かったような気がします」。では、その他の活動についてはどうだろうか。質問者がサークル活動についてはどうでしょうかと問うと「いちおう、副部長にまではなっていたんですけど」と答えたが、それを含めても自己評価は低いかと再度質問しても「いや、それを含めて、です。周りとの協調性をもって一つのことに取り組めたかという、自分の性格はちょっと閉鎖的だったなって。なので、あまりチームワークはできなかったかなって思います」とのことであった。

3-3-3. 考察

大学における学修のなかでチームワークを必要とする場面の多寡は、学部、学科、コースの性格と大きく関わる。全学的にみた時、初年次教育プログラムでは学生間の交流を図るという目的からも、しばしばグループでの作業を取り入れる。しかし、専門教育科目については必ずしもグループ単位での取り組みを必要としないことから、学生たちがチームワークを意識したり、その能力を伸ばす機会は限定的である。金城学院大学・国際情報学部は、科目の性格に関わらず、学部全体の方針としてアクティブラーニングの機会を多く設け、グループでの取り組みを推奨しているが、そのような学部、学科等の方針がなければ学生たちがチームワークの能力を強く意識して伸ばすことができないおそれもある。

今回のインタビューでは多元心理学科のAさんが特にチームワークの自己評価が高かったのだが、彼女には臨床心理士資格取得を目指したという事情がある。そのため、ゼミでの学修においてもつねにチームワークを意識し、それに取り組んだ。受講者同士が意見を言い合うこと自体はすべてのゼミに共通するが、臨床心理士という資格、職能の特性（人の話を聴く、話を聴き出そうとする姿勢を重視）とゼミの学修とが重なり合った結果であろう。類似の資格取得をめざす学科としてはコミュニティ福祉学科もあり、今後の比較研究を計画したい。

Bさんが学んだ国際情報学部は、海外研修を行うKIT（Kinjo International Training）や初年次教育プログラムであるWLI（Women's Leadership Initiative）A、Bをはじめ分野に限らずアクティブラーニング、グループワークを推奨している。そのため常時、チームワーク、リーダーシップをつよく意識させており、結果としてBさんのようにチームワークそれ自体を深く考えるようになる。インタビューでも明らかになったとおり、

彼女はこちらが想定するよりも詳細にリーダーシップを捉え、考え抜いている。

対照的に、Cさんは以上のような背景がない。これはCさんの個性によるものではまったくなく、学科の方針や専攻する分野の性格によるものである。このような状況に対し、全学共通かつDPに基づくルーブリックは、学部、学科の具体的なカリキュラムを適切に改訂するための指針となるだけでなく、学生一人ひとりにも科目履修の際に留意し心がけるべき方向性を示す手がかりとなる。チームワークはその典型例と言えよう。

3-4. 「コミュニケーション」

3-4-1. 「コミュニケーション」の調査

「コミュニケーション」のルーブリックは表7のとおりである。

表7：「DP対応ルーブリック」の「コミュニケーション」

4	3	2	1
相手の立場や価値観、考え方が不明であっても、幅広い話題、状況において、相互の立場や価値観、考え方を確認しつつ、相互理解を深めるコミュニケーションが可能である。	相手の立場や価値観、考え方がある程度わかっているならば、幅広い話題、状況において、自分とは異なる立場や価値観、考え方を相手ともコミュニケーションが可能である。	相手の立場や価値観、考え方がある程度わかっており、なおかつ限定された話題、状況においては、自分とは異なる立場や価値観、考え方を相手ともコミュニケーションが可能である。	自分とは異なる立場や価値観、考え方を相手がいることを知っている。立場や価値観、考え方の共通性が高い相手とであれば、十分なコミュニケーションが可能である。

3名のインタビューを表8にまとめる。

表8：「コミュニケーション」の調査まとめ

	回答レベル	気づいた点、感想
多元Aさん	レベル4	<ul style="list-style-type: none"> ● 中学・高校でバスケットボール部のマネージャーをやっていたためそこでの経験が大きい。そのため、大学入学時からレベル3はあった。 ● 大学入学後、アルバイトをするようになり、様々な人と話す機会が増えた。 ● 精神保健福祉士の実習で自分とは異なる立場の人と話す機会が多くあり、気づいたこと、学んだことがたくさんあった。
国情Bさん	レベル3	<ul style="list-style-type: none"> ● もともと自分の意見を言うのが得意ではなかった。 ● 国際情報学科の授業ではグループワークが多く、活動のなかで、気になったことは聞いたり、自分の意見を言うようになった。
日文Cさん	レベル4	<ul style="list-style-type: none"> ● 大学では、個人での学びが多く、大学でコミュニケーションを学んだという実感はない。 ● アルバイトで、初対面の人と話す経験が多いため、そこでコミュニケーション力を学んだと思う。

3-4-2. インタビューの詳細

<多元Aさん>

インタビューの初めに質問者が「高校卒業時に自己評価していたとしたらどのレベルだったと思いますか」と聞くと「レベル3くらいはあったと思います。高校の時も今と変わらずにおしゃべりで、部活動にも入っていて。中高一貫だったので（部員の学年も）上から下までいて、（その中で自分は）コミュニケーションをとるのが得意で。バスケット部のマネジャーだったこともあって、良いときも悪いときも（部員の）話を聴かなきゃいけない、支えなきゃいけないシーンが多かったので、いろんな知恵を絞って話を聴いていました。それはとてもコミュニケーション能力が高い（ことだ）なって、自分では思っています」と答えた。大学入学後の“伸び”はなかったのだろうかと質問すると「すごく伸びたと思います。ずっと女子校だったので、（大学入学後は）同い年の男性とお話するのが初めてで、すごく緊張したんですけど、考え方が違ったり、共学（校出身の）の女子もまた違って、それがおもしろくて、こういう考えの人がいるんだと勉強になったり」とのことであった。

大学生になってからはアルバイトの経験が大きかったようである。「アルバイトでも、ほぼ社員さんだけで私だけアルバイトなんですけど、10歳くらい上の先輩ばかりで人生経験が豊富なんです。結婚観や金銭感覚、友だちの話とかも、お話を聴いてコミュニケーションをとることもできたし。知らないことを知ることもできて、コミュニケーション能力や話題の幅はとても広がったと思います」。高校時代も年上の人と話すことはあったが上級生等に限られており、それ以上の年齢差のある、かつ同じ中高校といった近しさの無い人たちとの交流という点が、Aさんの自己評価を高めている。

精神保健福祉士の資格を取る過程での経験、KIDSセンター⁴での経験も彼女の自己評価を高めている。「精神保健福祉士の実習で、精神疾患をもっている方々とお話して、2週間という短い期間ですけど自分の中では計り知れないものを感じて。それ以前にもボランティアサークルに入っていて、KIDSセンターで小さい子のお母さんとお話しさせていただいたりしました」。

<国情Bさん>

Bさんは、コミュニケーションの自己評価をする際にどのような“場面想定”をして回答したらよいかわからなかった、迷った、と強調した。「（自己評価をするのが）すごい難しいなって思いました。レベル3とレベル4の違いがよく分からないんです。4の

⁴ KIDSセンターとは、金城学院大学内にある地域の子育てをサポートするセンターである。

“相手の立場や価値観が不明であっても”というのが、知らない人としゃべる時はだいたい（相手の立場などは）不明なわけじゃないですか。3はある程度知っている人を前提にしていますよね。そうすると、4をどう判断すればいいのか、正直難しい。知らない人でも、しゃべれる人はしゃべれますし、しゃべりにくい人とはあまりしゃべれないんで」。

<日文Cさん>

Cさんは、Bさんとは対照的に、コミュニケーションの自己評価はスムーズにできたという。「私は、分かりにくいということではなくて。3は例えば同じ学校の中で、しゃべったことがない人としゃべる感じではないですか？ そういう人と「卒論どう？」っていうような会話をすればいいんじゃないかなって思いますけど。4だったら、栄とか名駅を歩いていて、いきなり「こんにちは」って会話を始めることですよ、多分。そう考えたら、私には（質問が）あまり分かりにくくはなかったですね」。

3-4-3. 考察

Aさんは自己評価の際に、高校時代からの連続と変化、アルバイトといった場面を想起した。他方Bさん、Cさんはともにやや抽象的な場面設定をした上で、特にループリックが挙げる「相手の立場や価値観が不明」であることに留意しながら回答した。現行のループリックは学生一人ひとりの広範な経験に沿うため、意図して具体的な対象像を示していない。しかしそのような配慮が逆に、回答者に迷いを生じさせている。この点は今後の検討課題である。また多くの学生がアルバイト先でのコミュニケーションを想定する可能性をふまえ、その是非についても考えていきたい。

また、Aさんはインタビューの中で、就職活動時のコミュニケーションにふれて次のように話している。「(就職活動時のコミュニケーションを自己評価するとしたら、評価が)上がることもなく、下がることもなく、本当にこのままで就職活動をした感じです。(面接時に)グループディスカッションをした時は、自分の持っているコミュニケーション能力、話を聴く能力が試されたと思いますが、そのような時に(力を)活かせたので、難しさはなかったです。もちろんキャリア支援センターの方々のご指導であったり、栄のサテライトにもお世話になっていろいろ教えていただきました。コミュニケーションは聞くと話すの両方が備わっていないとダメということで、自分には聞く力が足りなかったのもっと相手の話を聴いてから、受け入れてから自分の言葉を発するようにしようと意識して就職活動をしました。その意味では(就職活動を通じてコミュニケーション能力が)上がったと思います」。卒業年次の学生にとっては、4年間の学修の一

つの到達点でもある就職活動時をふり返って自己評価をすることの意義もある。

就職活動とは対照的に、Cさんは「栄とか名駅を歩いていて、いきなり「こんにちは」って会話を始めることですよ、多分」と言っている。このような場面を前提に自己評価がなされるとすれば、質問者側の想定範囲を越えるものと言える。ループリックの汎用性と限定のバランスをとるのも今後の課題である。

4. まとめと今後の課題

2章で述べたとおり、ループリックは学生の能力を評価するのに適したツールである。知識だけではなく、汎用的技能や態度・志向性など、今まで「あいまい」にしか示してこなかった評価を整理し文章化し段階化することで、入学から卒業までの学びのプロセスを提示することができる。しかし、評価の表現が難しく、今回のインタビュー調査でも多くの課題がみえてきた。今後も、インタビュー調査を行いながら検討・改訂を重ねていきたい。

また、インタビュー調査を通じて、学科の学びの特徴や課題もみえてきた。ループリックは個々の学びをはかるだけでなく、大学、学部、学科のカリキュラムや教育手法を振り返る良いきっかけになることがわかった。今後、この結果を学科の学びのなかにいかしていきたい。

そして、本研究のタイトルにもあるとおり、大学のループリックは「大学」だけで独立するものではない。大学のループリックのレベル1は高等学校との接続、レベル4は社会との接続を意識する必要がある。この視点を大切にしながら、学生が「一生」という時間軸のなかで学びが段階的に発展的に行われるようサポートしていきたい。

付記

この研究は、金城学院大学人文・社会科学研究所2019年度共同研究プロジェクト助成を受けて行われたものである。

参考文献

- 岩崎公弥子、内山潤、時岡新、柳瀬公代、福田順（2019）「中高大が連携したライティング・ループリックの開発」『金城学院大学人文・社会科学研究所紀要』（23）、pp.1-14.
- 山田嘉徳、森朋子、毛利美穂、岩崎千晶、田中俊也（2015）「学びに活用するループリックの評価に関する方法論の検討」『関西大学高等教育研究』（6）、pp.21-30.
- 渡辺恭子、岩崎公弥子、内山潤、時岡新（2019）「ディプロマ・ポリシー対応ループリックのICTによる学生自己評価の実施について」私情協 2019年度教育イノベーション大会、私立大学情報教育協会.